

越佐 歴史漫筆 ～ 往ったり来たり ～

4

越後の盆踊り

新潟市歴史博物館(みなとぴあ) 館長 伊東 祐之



PROFILE

伊東 祐之 (いとう すけゆき)

1952年長野県の生まれ。新潟市で育ち、新潟大学人文学部・東北大学大学院で日本史を学び、『新潟県史』『山古志村史』など自治体史の編さんに参加する。江戸時代から近代の新潟地域の民衆社会を主に研究する。1987年から新潟市に勤務し、新潟市史の編集にたずさわる。2001年から新潟市歴史博物館みなとぴあの開設準備に加わり、2004年3月の開館後も新潟市歴史博物館に勤務する。2018年から館長を務める。

■ あまのてぶり

今年は懐かしい人々は帰省してくるだろうか。夏祭りや盆踊りができるだろうか。

みなとぴあは「あまのてぶり」という巻物を所蔵している。初代の新潟奉行川村修就(かわむらながたか)が江戸の子どもへの土産に新潟の6つの風俗を絵師に描かせ、嘉永5(1852)年に自らが説明の文章を付けたものである。その一景に新潟町の盆踊りがある。この絵が新潟下駄総踊りのヒントになったという。その川村の説明文の出だしには「越後国の盆踊りが盛んなことは、どこでも子どもでもよく知っているほどで、町や村でいくら踊りの振りに違いはあるが、国中すべてどこでも踊っている」(以下、資料引用は抄出意識)と書かれている。江戸時代の後期には越後といえば盆踊りというほどだったらしい。これは幕府の役人を引退して出雲崎

で遊んでいた新楽閑叟(にいらかんそう)という人も、寛政11(1799)年に「この国のおどりを好むのは甚だしい。なかでも盆のおどりは国中大騒ぎで海が震え山が揺れるのではないかと思うほどだ」「村々は毎年のことなので、何か村で集まる広い場所が決まっていて、千人二人人ほどが黄昏から集まり、暁まで踊る」と村々でも盆踊りが盛んだと言っている。

さて、新潟町の盆踊りはどんなものだったのだろうか。川村の説明文は続けて「暮近くになると14,5歳の女の子などがそろって踊りはじめ、月がやや高



「あまのてぶり」盆踊りの図



「あまのてぶり」盆踊りの図（部分1）
樽を叩いてリズムをとり、下駄をはいて踊っている。

くなるころには老若男女が思い思いの姿になって踊り「あまりに多く集まると込み合ってたただ押し合っているようになって」「夜更けになっても歌い舞って」「町中を踊り歩き空がしらむ頃になって帰る」「こうして4,5日の間、昼は寝て夜はよもすがら踊り、それぞれの仕事を打ち捨てても困ることもなく楽しんで」とある。

絵を見てみると、皆がそろった振りで踊っているようではなく、姿も様々である。この様子をもう少し驚きの目で書き留めている人がいる。慶応4（1868）年、戊辰戦争の最中、新潟町を管理していた米沢藩の藩士の日記にはこうある。「堀の橋々の上や道の辻、広い小路で踊り狂う様子は、女は、白ふんどしをしてあて子一枚で裸で踊っている者がいる。あるいは半纏（はんてん）で男の格好をしている者もいる。大小の刀を差して踊っている者がいて、男かと思ったら女だった。赤紫の縮緬を着て女帯をしているので女かと思ったら男だった。僧侶が女の格好をしていたり、女が僧侶や神主の格好をしていたりする者もいる。中国人の真似をする者、役者のような扮装の者、丸裸に藁を巻き付けた者など、異

類異形の者が踊ったり跳ねたりしている。大騒ぎだが、戦争なのでいつもの五分の一ほどの賑やかさだそうだ」。たしかに「あまのてぶり」をみると異装の者が描かれている。ここに記され描かれている踊りの様子は、ほとんどカーニバルであり、男女や身分を逆転させ、日常から解放された姿である。

■ 甚句は越後

では、盆踊りの歌はどんな歌なのか。新楽は盆踊りの話しの前に越後の歌のことを次のように書いている。「越後の人の歌を覚えようと聞き学んだが、節はまねても音声は決してまねできない。越後の歌に色々あって、「甚九」は新潟（江戸の甚九は全く別物と註がある）、「おけさ」は出雲崎、「三賀ぶし」は柏崎、「春の日足」は今町（直江津）、「松坂」は新発田、「ちんゆんぼ」は佐渡がある。これらをよそ者が真似しようとしてもできない」（抄出意識）。

新楽は「甚九」は新潟と書いているが、全国的には越後の歌の代表が甚句で、踊りの代表は甚句踊りだった。私は歌や踊りが苦手なので、板垣俊一氏の研究や深谷大氏の著作によって、甚句のことを少し記す。甚句は「ゑびやの甚九ぶし」といい、もともと18世紀の初めに兵庫・大坂で流行し、全国に伝わった。歌は「くどき」といい単調な旋律の繰り返しにのせて事件や事実を歌う。これが越後で流行り、さらに越後節とか新潟節とか言われて全国で有名になった。十返舎一九は「東海道中膝栗毛」四編で、熱田宿のあんまに越後節を歌わせているという。また、感和亭鬼武の滑稽本「旧観帖」初編では、「よくよその国の人が、越後のおけさ、松坂、甚句などをやるが、越後者のようににはできない」と「越後の人」に言わせているという。また、「東海道四谷怪談」

では「どうでも伴助は越後産ゆえ甚九はきついものじゃ」という台詞があるという。

そして水戸弘道館教授佐藤成裕は「中陵漫録」で「越後の甚九踊の如き盛んなるはなし」「今は盛なるは越後の如きはなし。男女老弱相聚て足を踏つて唄い、手を打つて其節を正し声を助く」と甚句を歌い踊っていると記している。つまり、盆踊り歌として越後の人々が盛大に甚句を歌い踊るということは、全国で有名であったのだ。

■ 盆割り

さて、新楽は村々で人々が集まって黄昏から暁まで踊ると書いた後に「これも皆、桑中の約あるもの也」と記す。「桑中の約」とは諸橋轍次先生の『大漢和辞典』によれば「男女不義の約」とある。盆踊りは踊り狂うだけの場ではなかった。越後を渡り歩いた江戸の食い詰め芸人繁太夫の旅行日記「筆満可勢」には越後の田舎では「盆割り」というしきたりがあると次のように書いている。「村の「若い衆」が自分たちの人数と同じ数の娘を選びくじびきをして、盆の間の相手になる。娘は否応ないが、「深き

いろ」(恋人) がいる者はその旨を「若い衆」の頭に話してくじから外してもらおう。どれほど固い娘でも「この盆になれば皆うわきになり、いろをせぬは稀なり」。「若い衆」の頼みを聞かない親や娘は川へ投げ込む」。

江戸者が越後を田舎として誇張して書いたものだろうか。『加茂市史』に嘉永2(1849)年に鶉の森村の若者たち13人が村人庄吉にはぎ木を切り倒すなど農業の邪魔をしたと訴えられ、和解した際の誓約書が掲載されている。若者たちの所業のきっかけを誓約書ではこう書いている。「13人は「若者仲間」で、前々から「盆割り」と言って、くじをひいて、村の娘や下女奉公人などを盆の間の「内女房」に決めて遊んでいた。庄吉の家に来ているキソという女を下女と思い、夜遊びに出すように庄吉に求めた。しかし庄吉の子与七はキソは親戚から預かっている娘で息子長吉の嫁にするつもりだから夜遊びには出さないと断った。与七の言い分は「一統の申し合せを取崩す」ことになると、若者たちは怒って仕返しをした」。

■ 盆踊りの禁止

盆踊りは村と村とが争いを起す場にもなった。様々な記録が残っている。たとえば、天保5(1834)年には下新村の盆踊りに金屋村と北村の若者が大勢で押し寄せ喧嘩となり、金屋村の者が飛び口で負傷する事件が起きている(いずれも現新潟市秋葉区)。弘化3(1846)年には山口村の若者5,60人が駒林村の盆踊りの邪魔をし、会場の寺の板塀や門戸を壊して、駒林村の警固役の者と喧嘩になった(いずれも現阿賀野市)。嘉永4(1851)年には金津村高岩寺の盆踊りに古津村の者30人ほどが裸にあみがさ



「あまのてぶり」盆踊りの図(部分2)
仮装して踊っている。

という恰好で押しかけて、警固役と喧嘩になった(いずれも現新潟市秋葉区)。

若者にとって祭・盆踊は、ムラとムラとのしのぎあいであり、それぞれの村は他村の若者の乱入に備えて警固役を配置していた。盆踊りや祭りでの喧嘩口論は祭礼の一部であり、娯楽でもあった。

村々の若者にとって日常を離れ、ハイテンションで踊り、喧嘩し、性を享受する機会であったとしても、治安を守るべき藩は放って置けなかった。新発田藩は不作や洪水などを理由に毎年のように盆踊りを禁止した。天明6(1786)年の達しでは「近年盆中組々村々の若者共が心得違いをして他所他村等へ行って喧嘩口論をし、藩が苦勞しておりはなはだ不届のことである。よって今年の当盆中は一村限りで昼の内の子供の踊りは許可するが、十五才以上の者は決して盆踊りに出てはならない」と命じている。さらに盆踊りの時期に役人を村々に派遣して取り締まりに当たらせている。

明治となって新潟県は風俗の矯正に力を入れる。先号で書いたように休日の制限を加え、江戸時代以来の習俗をやめさせようとする。新潟県の盆踊りに対する認識は以下のようなものである。

そもそも越州は他国に比すれば淫風大いに行わる。その弊少なしとせず、すでに新潟港の如きは淫をひさぎて以って潤として恥じる色なく、かえって得意の趣を呈す、したがって各郡僻土に至っては例年七月盆祭に当り盆踊りと唱え一種の淫弊あり。まずその各町村内に一か所あるいは二か所櫓(棧敷を仮築す)を設け、笛太鼓を囃し音頭取りの唄うに応じ、男は女装し女は男装しあるいは異形の物を冠りあるいは思い思いの異風をなし、男女混交団連して躍る。その唄たるももっとも猥褻の語多し、また甚しきはそ

の踊り半ばにして雑沓に紛れ処女の手を取りあたかも公然の妻の如くす。これを盆踊りと称し年中第一の好楽とす。

従って、新潟県は盆踊りを毎年のように禁止する。毎年のように禁止するという事は、禁止されても踊る人々がいたということである。明治10(1877)年9月5日「新潟新聞」には8月23日が旧暦の盆7月15日だということで「若いものが二三人も集まり太鼓を鈍々叩き立てドンドン盆踊りを始めると、いとど待ち構えたる村の人はソレ見ろイヤあの音を聞け盆踊りが始まった、あそこの家でさえおどるから構うことがあるものか、サア踊れ踊れと隣から隣りの者を誘えば、たちまち腰の曲った爺々婆からオギヤアオギヤアの赤ン坊まで得たり賢こしと飛出し鈍チャンチャン踊って廻る、その響きはまた隣村から隣村へ伝わりアノ村もこの村もほとんど気違いの暴れる騒ぎ、おまけに向う(中ノ口川)の村からも異体の様子で踊り来り、夜通しの馬鹿っ騒ぎ」という記事が掲載されている。

新潟市でも満州事変までは盆踊りは盛んだったが、戦争で盆踊りは行われなくなった。なぜか戦争が終わっても盆踊りは復活せず、整然ときまりを守る大民謡流しに変容した。「あまのてぶり」をヒントに始まった総おどりはエネルギーが豊富だが、お行儀よくそろって踊っている。

(参照:『新潟市史』・『新津市史』・『新潟県史』・『加茂市史』・『さし絵で楽しむ江戸のくらし』深谷大・『新潟県における明治の唄本(三)』板垣俊一)